望が通れば嬉しいなどと心にもないことを言う積もりはありません。人としての立場で言えば、たいへん悲しいことです。管区としては、アイルランド、ザンビア、香港の三つの宣教地区を持ちながら、前途有望な二名の若者を海外布教に出すということはたいへん大きな犠牲です。しかしあなたは神が命ずる自分の人生のあり方を自分で一生懸命に考え抜いて探し当てたのです。私はともかく、その点ではあなたは幸せです。だからおめでとう！と言います。善良なる神は悲しみのあなたの家族に助けの手を差し伸べてくれるでしょう。しかし人の情としては、私たちには大打撃です。あなたの両親にとってどれだけの助けになるかはともかく、いつでもできることは何でもするので安心してください。

復活祭には仕事か休みでダブリンに戻って、みなさんのところをちょっと覗いてきます。
Ad multos Japanicos annos!
In Xto servus,　D.O'S, S.J.

そして、・・・・・日本へ

1958 年 7 月 31 日、船は香港に向けてナポリ港を出港しました。この船旅は、スエズ運河を経由して、アデン（南イエメン）、ポートサイド（エジプト）、カラチ（パキスタン）、コロンボ （セイロン＝スリランカ）、ボンベイ（インド）、シンガポールの各港に寄航し、3 週間後に香港に入るというものでした。想像いただけると思いますが、この船旅はたいへん魅力的なものでした。一日一日と船旅の日を重ね、ヨーロッパから徐々に遠く、さらに遠く離れていくにつれ、＜極東＞というものの意味が分かりはじめてきました。

香港に少し滞在したあと、Dermot Brangan と私は貨物船で横浜に向かいました。横浜到着は1958年 9 月3日でした。Dermotは 25歳、私は26歳でした。

2年間は日本語の勉強でした。Dermot Brangan と私を含めて、神学生は7ヵ国からの 20 人でした。イエズス会の管区で言えば、16管区からの神学生たちでした。このようにして日本での（私にとっての）インターナショナルな生活は始まったのです。

同じ年の 10 月 18 日に日本はイエズス会の完全な管区に昇格することが公式に

発表されました。Arrupe 神父は新しい管区の管区長にそのまま任命されました。

日本語研修が終わると、私は日本語研修所と同じ構内にある栄光学園で中間期をするように命じられました。

Adolfo Nicolas が同じ共同体に加わって日本語学習を始めたのは、私が栄光学園で教鞭をとって2年目の1961年3月のことでした。彼とは1962年の夏まで一緒にいました。1962 年の夏までというのは私が神学の勉強のためにアイルランドに帰ることになったからです。Adolfo Nicolas は得に言えぬ天性の親しみやすい性格で、温かい微笑を絶やすことなく、素晴らしいユーモア・センスの持ち主であるという点で、ここの共同体では突出した人物でした。(実は、Adolfo Nicolas 神父は 2008 年 1 月に 全世界のイエズス会の総長に選ばれたのです！)

中間期時代の英語の授業は楽しいものでした。同じ共同体に Gerry Bourke がいたことも幸運でした。Dermot は、すでに広島学院に中間期を任命されてそちらに行っていました。

私が日本に来てから3年目の1961年に、私の父は亡くなりました。先に引用した父の手紙に、私が神学の勉強にアイルランドの Milltown に帰ってくることを待ち望んでいたことが書いてありましたね。父の死後はじめて知ったのですが、父はすでにその時点で残された余命は 1 年半と医師団から伝えられていたのです。しかしその見通しを超えて、それから倍の3年も生きました。父自身医者で、自分の死の当日すらも患者の診察をしていたそうです。

父が Dunlaoire の Mail Boat で私に「さよなら」を言ったとき、これが最後の別れで、生涯二度と息子とは会えないことを知っていたのです。

父は自分のかかえる健康問題を家族の誰にも秘密にしていました。父はなんと母にすら打ち明けてはいませんでした。

父の死の翌年、Arrupe 神父は私のためにアイルランドで神学を勉強するよう段取りをしてくれました。神学の勉強の 4 年間の Milltown での生活は、私の人生にとって特別なものでした。

1965年に私は司祭に叙階されました。

叙階と言えば興味ある逸話があります。その年に司祭に叙階された仲間たちは修道院長の Brendan Barry 神父に対して、英語の聖務日祷（breviary）を手に入れることを許してくれないかと頼んだのです。しかし、その要望は却下されました！そこで私は倫理神学の教授の Paddy Joy 神父のところに行って、そのことについて相談しました。私の上司は日本管区長であり、日本管区長にじきじきに手紙を書いてもいいのですがと言いました。Paddy Joy 神父は、ぜひとも日本の管区長に手紙を書きなさいと言われました。もし Arrupe 神父が許可を与えれば、他の会員たちも同じ要望に対して許可を得やすくなるでしょうと言ってくれました。

日本管区長の Arrupe 神父から公式に私の要望を祝福した手紙が届きました。「自国語で聖務日祷を祈ることはたいへん素晴らしいことです」と書かれていました。その手紙の末尾には「間もなくローマに向かいます。ローマでイエズス会の総会の準備に加わるためです。どうぞ私のためにお祈り下さい。 Pedro Arrupe, S.J.」とありました。（‥‥Arrupe 神父は、その総会でイエズス会総長に選ばれたのです！）

第三修練のために日本に帰り、そのあと広島学院に派遣されました。10年間そこで英語を教えました。その当時は、日本管区には帰国休暇制度というものはありませんでした。10年ごとに母国に帰れる休暇制度が出来たのはあとになってからのことです。

Arrupe 神父 と言えばこういう逸話もあります。1971 年神父はイエズス会総長として日本を訪れました。ちょうど広島学院修道院長に私が任命されたすぐあとのことです。広島学院でのミーティングに案内する道すがら、何かアドバイスがあったら教えてください、とお訊きしました。Arrupe 神父は、「はい、つねにあなたの同僚を完全に信頼しなさい。私は時々人を信頼しすぎると言われます。しかし私はたとえ信頼して裏切られることがあったとしても、信頼するほうがいいと思っています」 と言われました。

私の広島における 10 年間は満足すべき時間でした。地元の人からも、生徒からも、生徒の親たちからもたくさんのことを学びました。彼らを通して戦争と原爆の恐

るべき悲惨さを実感することが出来ました。現代の核兵器を考える時、核兵器は「悪」以外の何者でもないと断言できます。

1977 年東京に移り、上石神井の神学院長に任命されました。この異動は私にとって高校という生き生きした場所から静かな場所へという大きな環境の変化でした。 約 4 年間そこで過ごして、そのあと 3 年間、管区長秘書の仕事をしました。この間パートタイムでしたが、上智大学で英語も教えました。それは高校の授業とは別の体験でした。大学生は高校生と異なり、若い大人です。このチャレンジは楽しいものでした。学生一人ひとりに関わるにつけ，神についてたいへん多くのことを学びました。日本では特定の宗教への信仰を持っている学生はたいへん稀です。

しかし、彼らは他人を思いやる善良な人々であり、日常生活において、丁寧で礼儀正しく、他人に親切です。学生たちとの関わりの中で、彼らは自分自身の中に神が存在しているなどということはまったく意識していないにもかかわらず、一人ひとりの中に神が存在するのだと、私はよりはっきりと意識するようになっていました。

思うに、ほとんどの日本人は、神秘的なあるいは超自然的な何かがあるのだと信じているのです。しかし彼らはそれが何であるかを解明しようというようなことには興味はありません。

「あなたはひとりではないのですよ。あなたの中には神が住んでいるのです」と言うと、彼らは慰められる、ということを知りました。

私自身、日本という無宗教で信仰をもたない環境の中で生活して、つねに自分の信仰が純化されているのに気がつきました。

もう一つ気づいたことは、はじめに言ったように、日本での人との出会いは、次の出会いにつながっていくということです。その日、その日の新しい出会いはいつも神の導きによってなされていくもののように感じます。

7 年前、私のイエズス会入会 50 周年記念の祝賀会が開かれ、それに出席するためアイルランドに帰りました。その記念ミサで私は自分の人生を導いてくれた神の

偉大な恵み、日本での神との神秘的な出会いの恵みについて話しました。

実は日本ではすべてが順調だったということではありません。たいへん困難な時期が何回もありました。もっとも日本でなくても、どこにいてもそういうことはあるものですが、自分がイエズス会員として、神父としての召命について疑いを持ったことはまったくありませんでした。

日本で実際息が詰まりそうになった一時期がありました。日本を脱出すれば気は楽になる、そうしようかという誘惑にも駆られました。そういう場合には、とくに上司たちの大きな支えと理解が私を助けてくれました。そのおかげでその困難な時期を克服することが出来ました。

日本人は一人ひとりの個人は素晴らしい人たちです。しかし日本社会では自発性が欠けていますし形式にこだわります。特に人間関係や普通とは思えない労働倫理では。

神は「弱者の中の最弱者」とも言うべき自分をどうして日本にまで連れてこられたのかという問いは、私にとって常に不思議に思われる源です。日本に自分が来られたことは、すでにお話ししたように、私の人生でもっとも神秘的にして素晴らしい恵みなのです。

Francisco Xavier（フランシスコ・ザビエル）は 1552 年にインドからの書簡の中で、ローマの同僚に対して日本にもっと人を送れと強く要請しています。そして「日本で彼らは多く困難と同時に大きな霊的な慰めに出会うであろう」と書いています。ザビエルのこの言葉は何と真実を語っているでしょうか！

いま滞日 50 年を振り返るとき、素晴らしい修練長 Donal O'Sullivan 神父と出会うことが出来た恵みに対して神に感謝を捧げます。O'Sullivan 神父は私の知的な精神と情的な心をより広い世界に開いてくれ、霊的な見極めの道を整えてくれたイエズス会会員でした。

イエズス会アイルランド管区は、はじめから私の日本行きに賛同し、励ましてくれました。感謝します。

大きな愛と理解をもって私の日本での布教生活において心を分かちあってくれた両親と家族に感謝します。

イエズス会日本管区には世界各国から会員が来ています。たいへん国際的であり、同時にたいへん日本的でもありますが、この私を兄弟として受け容れてくれたことに感謝します。今の私があるのは日本の人々のおかげによりますことを感謝します。

最後になりますが、この 50 年の間、二人の従兄弟のイエズス会士(残念ながら二人ともすでに亡くなりました)、ともに私の父の姪の息子に当たる二人の Philip (Philip Harnett と Philip O'Keeffe)の存在がいつも私の慰めになりました。

この Interfuse 誌で、私が日本に召し出された神秘的な恵みを分かち合っていただき、皆様方お一人お一人を修道生活に導かれた神の恵みに対して、皆様とともに感謝します。

End